

「しん」(しんにょう)の画数

—江戸の人々と漢字(一)—

米谷 隆史(日本語学専攻・表記史)

国語辞典と比較して漢和辞典の肩身は狭い。広辞苑や大辞林を買うのには何千円も出すけれども、果たして同じような額を漢和辞典の購入に充てる人がどの程度いるだろうか。最近の学生は大学進学のお祝いに電子辞書を買ってもらうことが多いようであるが、電子辞書のデータには漢和辞典が入っていないものも少なくないし、入っていても、英和辞典や国語辞典に比べて、かなり簡単なものであることが多い。

もちろん、それには理由がある。端的に言って、漢和辞典は持っていないなくても日常生活にそう困ることはない。漢和辞典が収める主な情報は、漢字の形(画数、画順とも)、ヨミ、意味、その漢字を頭字に置く漢語とその意味である。まず、漢字の形は国語辞典を引いてみれば活字はやや小さいながらすぐに確認できる。社会に出て漢字の画数や画順が問題になることはほとんどないし、ヨミにしても、新聞などでは漢字制限が随分効いていて、読めない漢字に出会

う機会は減っている。また、漢和辞典によっては、日常的なものではなく、中国の古典に出てくる文脈の理解に役立つような漢語(やその意味)が重視されていたりもする。

これは、見方を変えれば、広辞苑レベルの国語辞典に載っていない情報が小学校高学年の頃に買った漢和辞典に載っていることがあるということでもあって、時によってはたいていそう役に立つのではあるが、所詮、時によっては、である。

もう一つの理由はその引きにくさである。最近では、どう読むかわからない漢字のヨミを知るために、パソコンのワープロソフトの「手書き入力」で漢字を見つけ出し、その漢字の文字情報を見るという手段があるようである。しかし、そういう手段がなかった頃はやはり、漢和辞典を引いて調べることが多かった。それでも、漢和辞典は目的の漢字に行き当たるまでに時間がかかるから、多くの人は漢和辞典を引く前に周囲の人に聞いたり、偏や旁(つくり)で当たりをつけてそれらしいヨミで国語辞典をあちこち引いたりするはずである。それでわからないとようやくあきらめて漢和辞典に手を伸ばすことになる。例えば「莖」という字(皆さんはこの字の音がホウ、訓がヨモギであることなどご承知であろうが)であれば、ヨミはわからない(ということになってい)から、例えば、部首は草冠かな、と思う。だが、その草冠を部首索引の中からさがすのも、手間である。草冠は「艸」と見るなら六画、旧字体の「艸」なら四画、新字

体の「セ」なら三画であるが、ちょっと古い漢和辞典まであれこれ見てみると、辞典によってその所在は一定しない。草冠のページを見つけたとしても、部首の画数すら危ういのだから、それ以外の部分の画数をはっきりと特定できない場合も多い。そうすると、想定した画数の前後のページまで探索の手をひろげなくてはならない。その上、よくいわれる通り、漢字によっては部首が定かでないものがある。所属する漢字が多い草冠の探索の後、もし目的の漢字がなかったら、しんによるの部首に所属している可能性を考えて、また右の探索を繰り返すことになる。もちろん、多くの漢和辞典は総画索引というものを備えていて、これも時には役に立つが、画数が同じという理由だけで（さすがに同じ部首の漢字はまとまっているが）ぞろりとならべられた漢字がページ一杯に詰まっているその索引は、あまり検査意欲をそそらないことも確かである。漢和辞典の肩身が狭いのは、一つ目の理由もあるだろうが、やはり、この辞典の敷居の高さが最大の理由であろう。もし、国語辞典なみに十秒かそこらで目的の漢字に行き着ければ、もう少し漢和辞典が日の目をみることもあるであろう。

ただ、現代の漢和辞典のために一言するならば、これでも漢和辞典は随分引きやすくなったのである。図1は、一六〇〇年代前半頃まで日本で最も広く参照された『大広益会玉篇』（以下『玉篇』）という漢和辞典の一部分（巻二三

<p>龍部三百八十一 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百八十二 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百八十三 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百八十四 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百八十五 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百八十六 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百八十七 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百八十八 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百八十九 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百九十 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百九十一 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百九十二 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百九十三 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百九十四 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百九十五 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百九十六 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百九十七 龍 龍 龍 龍</p>	<p>龍部三百九十八 龍 龍 龍 龍</p>
------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------

図 1

の「一三丁」である。『玉篇』は中国宋朝の、〇三年の成立。二〇巻の大部な書物で、部首の総数は五四二部首。現代の漢和辞典は概ね中国清朝の、七一〇年に成立した『康熙字典』の二一四部首に従っているので、随分と異なる。図1は三八一番目から三八五番目の部首の部分であるが、三八一番目の「龍」は明らかに三八二番目の「虍」よりも画数が多い。つまり、『玉篇』では部首の配列は画数順ではない。この部分の並びからおおよそ知られるように、意義分類的な配列順を採っているのである。したがって、『玉篇』を自由に引くためには五百以上の部首がそれぞれどのような位置に配列されているかを粗々知っておかなくてはならないのである。さらに部首の内部はどうかというと、例えば「虍」の部中、「虞」の後に「虔」があることから知られるように、こちらもやはり画数順には並んでいない。さて、部首内部の配列順となると、これは規則的なものを見つけないのが困難であって、漢字を探す方としては、頭から順に見ていくしかないということになる。このような字書で、部首が定かでない漢字を探す人の心細さたるや推して知るべしであろう。探そうとする漢字が先ほどの「蓬」のように、所属漢字数の多い草冠かしんじょうかで迷う場合など、よほど運が良くなければ見つかからないのではないかというような気すらしてくる。

『玉篇』のこのような不便さは江戸時代の人々も痛感し

ていたらしい。小規模なものではあるが、明暦元年（一六五五）には『奇字早鑑』という検索補助書物が刊行されている。図2はその一部分で、総画数「十六畫（画）」で所在がわかりにくいと思われる漢字が『玉篇』のどこにあるかを示している。「虍」が並んだ漢字と「龍」の下には、ともに割書で「微宮／喉宮」と書いてある。一体この割書は何かということになるが、図3の『奇字早鑑』の凡例を御覧いただきたい。これは、漢字の下に割書される漢字と数字

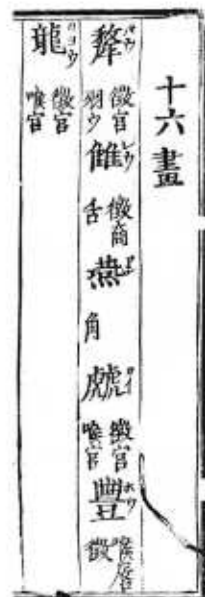


図2

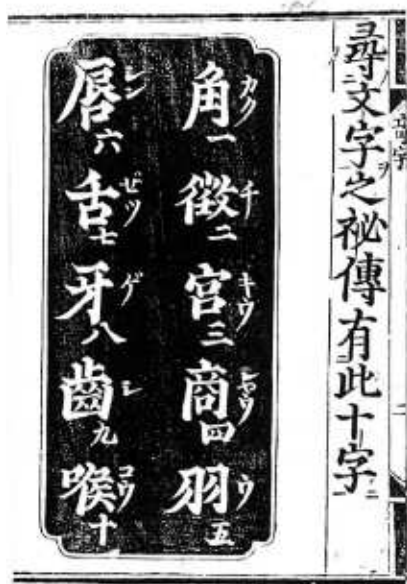


図3

の対照表である。^(註)これに従って「徵宮／喉宮」を翻訳すると「二三／十三」ということになる。つまり、この漢字は卷二三の一三丁(図1)にあるということなのである。同様に「雫」は卷二四の七丁、「燕」は同じ巻の丁に確かに掲載されている。巻数や丁数の表示に、なぜこれほどに回りくどく暗号めいた漢字を使用したのかは、未だ十分な検討が済んでいない。ただ、引きにくい漢字を探すためだけにこれだけの手続きを踏ませる参考書があることから考えれば、『玉篇』は当時最も流布した漢和辞典であったとはいえず、一般人が簡単に手にするところの書物ではなかったものと推測される。

実は、先ほどの『奇字早鑑』が刊行された一六〇〇年代後半には、既に、中国で出版された画数引の字書が日本でも刊行されていた。代表的なものは一六一五年に成立した『字彙』で、一二四部首、部首も部首内部の漢字も画数順に配列しているので、形式的には、ほぼ『康熙字典』と同様と見てかまわない。この頃には配列に画数を用いる字書が他にも刊行されるようになったので、ようやく人々は画数を手がかりにして比較的容易に漢字を引くことができるようになった。ちなみに、管見では「字引」という語の確例が日本語にはじめて登場するのもこの頃である。

さて、標題のしんによる画数である。現代の字書では、漢字の部分としてのしんによるは、旧字体の「しん」の場合

四画、新字体の「しん」の場合三画として数えている。例えば、最初に言及した「蓬」は、常用漢字表に入っていないので、自動的に旧字体となり、「しん」四画+「条」七画で、草冠の一画に掲出されることになる。これは、『康熙字典』やそれに先立つ『字彙』でも同様である。ところが、江戸時代に遡ると、全ての字書が同じような扱いをしているわけではない。



図4

図4は寛文四年(一六六四)に刊行された『袖珍倭玉篇』

である。日本人が編集したもので、音と訓とを片仮名で示すのみの簡便な字書である。掲出の字体は「蓬」(しんによる部分は新字体)で、前後の漢字の画数を数えていただければおわかりの通り、草冠の九画に位置している。次の図5は、同じく寛文四年刊行の『新刊大広益会玉篇』で、中国で刊行されたものを日本で再版したものである。こちらの掲出字体は「蓬」(しんによる部分は旧字体)で、草冠の一画に存する。草冠と「しん」部分以外が七画で紛れもな



図5

い「車」を有する「蓮」「蓮」が、両書とも「蓬」「蓬」と同じ画数にあることから、前者は、新字体の「蓮」を二画で数え、後者は、旧字体の「蓮」を五画で数えていることになる。現在標準的な『字彙』や『康熙字典』の画数と比較してみると、前者は、仮に旧字体の「蓮」を採用して一画増やしたとしても三画にしかならないので、画少く、後者は、画多いということになるのである。

『袖珍倭玉篇』のように少なく数えるのは、草書で書く意識に近いのではないかと、『新刊大広益会玉篇』のように多く数えるのは、丁寧な楷書を書く意識に近いのではないかなど、あれこれと推測はふくらむが、ともかく、画引の字書が流布し始めた当初は、しんによるの画数は字書によって異なっていたのである。後者のように五画で数える字書は日本国内では他に出版されなかったようであるが、前者のように二画で数える字書は、七〇〇年代初頭まで何度か版を重ねており、決して特殊なものではなかった。

日本におけるこうした画数のバリエーションが、いつ頃、

どのような経過をたどって『字彙』や『康熙字典』の基準に統一されていったかについてはなお明らかにしなければならぬことが多い。ただ、漢字をたいそう良く知っていたと言われる古の日本人や中国人にとっても、画数というものは決して自明のものでなかったということ、さらには、画数というものは、漢字に固有のものではなく、字書の配列（乃至は検索）のために便宜的に設定されてきたものという面が強いということは確認しておきたい。現代の漢和辞典の擁護にはあまりつながらなかったかもしれないが、引きやすい字書を目指してきた字書編纂者の工夫の歴史と、画数の歴史とが深く関わっていることだけでも記憶いただければ幸いである。

〔注一〕この漢字と数字の対照は、早く寛永年間の刊行の『五音図』（古今編会）という字書の参考書」という書物で採用されている。
〔注二〕中国でも、『海篇』と総称される画引字書群には、『字彙』とは異なつた画数の数え方をしているものが存する。

参考文献 ・大島正二 『《辞書》の発明』（三省堂）

・『人文科学と情報処理』31（特集） どのように「表外漢字字体表」は答申されたか（誠誠出版）

図五の『新刊大広益会玉篇』は、大阪府立中之島図書館蔵本に拠つた。

○本稿は科学研究費補助金若手研究（B）「近世前期刊行の字書諸本に関する基礎的研究」（課題番号、六七二〇、〇九）の研究成果の一部である。

IV	V	VI	VII
旦那は男を箱に入れ、海に投げ込む 皆が離れる 通りかかった座頭「市官だ」と 言って入れ替わる 座頭は海に投げ込まれる	男が戻ってくる 旦那に竜宮行きを勧める 旦那は箱に入って海に投げ込まれる	教訓：自分で考えよ	
伯父は男を俵に入れる 海に投げ込む前に寺へ参る 通りかかった目の悪い鯛売りと入れ替わる 伯父は俵を海に投げ込む	男は鯛を持って戻る 伯父に深い所で鯛や鯛を捕るよう勧 める 伯父は俵には言って海へ沈められる、 戻らなかった		
村人たちが男を俵にいれ、海へ投げることに 酒をやるといって 旦那、帰らせる 通りかかったあんなに目の養生といっ て入れ替わる だまされた村人たちは戻って俵を海へ投げる	男が三ヶ月で戻ってくる 魚を配る	命い極める奴	
戻ってきた主人が怒って 俵に入れて川へ流される 岸に流れ着き、目の悪い魚売りに 目が治るといって入れ替わる 俵を川に流す	魚を持って帰る 竜宮へ行ったと言う 主人を川の深いところへ行かせ 溺れさせる	こんどこそ主人になる	
長者の息子たちは張を麻袋に入れて 川に投げ込むことにする その前に凍えさせるために放置する 目の悪い豚番に目が治るといって入れ替わる 息子たちは麻袋を川へ投げ入れる	張は豚を追って帰る 息子たちは川の中に豚を取りに行き 順番に溺れる	訴えによりエンマ工が張を 召喚する 使者たちが追い返される 最後にエンマ工が出向き 張と豚を交換させられる	張はエンマ工になりすまし エンマ工を殺り殺させる
工は少年を袋に入れて川へ投げ込む 助けてくれたラマナ（羊飼）を神に会え るとだまして入れ替わる	ラマナの牛を連れて帰る 工と息子たちは自ら縛られて川へ入っ て溺れ死ぬ	ダノ（精霊）を脅して神の もとへ 連れて行かせる 神を脅して妻を得る	不思議な力を持った召使に 工とその息子たちの骨を取っ てこさ 生き返らせる ラマナは忘れられたまま
村人たちは小百姓を穴の開いた樽に入れて 川へ投げ込むことにする 先に助けた僧が樽をしばらく放置する その間に村長になりたい羊飼いを、だまして 入れ替わる 樽は川に投げ込まれる	羊飼いの羊を連れて帰る 村人たちに川の中に羊がいると教え 全員を川に飛び込ませる	金持ちになった	
兄は弟を殺させることにする 袋に入れられた時、人殺したちが逃げ出す 学生に、袋に入れれば賢くなれるといっ て入れ替わる しばらくして学生を袋から出してやる			

題名	I	II	III
1 依頼師 (梗概) 白水村 女	作男 嘘ばかりつく	怠ける	嘘 奥さんが病氣
2 金をひる馬 小四町 男	知恵のある者	伯父に「金をひる馬」を売りつける	伯父に「火なし釜」を売りつける
3 俄ん中じ目の治療 阿蘇町 男	知恵人多え一悪びれた男	悪いことしたり(具体例なし)	嘘をついたり(具体例なし)
4 うそつきサン 新潟県 男	のめしこき(なまけもの)で うそばかりのサン 作男	主人を松の木に鷹の子がいるとだます 松の木から家が燃えたのだます 主人は上方へ縁ぎに行く	主人が死んだといって 主人になり代わる
5 エンマ様をおも殺した 農夫 中四 湖北省	張 長者の娘婿 長者は張が気に入らない	長者に「火竜の衣、としてぼろ服を売る 長者は火事に遭って死ぬ	
6 賢いアガリア インド マハーコーシャル州	パイガの女の一人息子 12マウンドの斧を持つ (=異符な力)	木を切ると木精を脅して金を得る 金を量る秤を工に借りる 金貨が秤に張り付いていたため 工は少年を殺して金を奪うことする	
7 一尺男と伯父 インド サンタル族	1スパン(尺)しかない男 割っている牛の糞に埋まる	牛を殺して皮を測ぐ たまたま泥棒たちを驚かせ金を得る 牛の皮を売って得たと伯父たちに言う 伯父たちは牛を殺して皮を 売ろうとするが売れない	仕返しとして、伯父たちは男の家を焼く 男は家の灰を袋につめて市へ行く 金の人った袋とすり替えて帰り、 家の灰を売った金だという 伯父たちは自分の家を焼き 灰を売ろうとするが物笑いとなる
8 小百姓 ドイツ グリム61	村で唯一の貧乏な百姓	木の牛を本物の牛に見せかける なくなった木の牛を本物の牛で 賄償させる 牛を殺して皮を測ぐ (僧と密会する女とその夫)	暮らしがよくなり、理由は牛の皮を 売って得た300ターラーであると言う 村人たちは自分の牛の皮を 売ろうとするが、売れない
9 かぶら ドイツ グリム146	二人の兄弟 金持ちの兄と貧乏な弟	貧乏な弟はかぶらを作る 巨大に育ったかぶらを工に献上する 王からたくさんの金をもらう	兄は金や馬を工に献上する 王はかぶらを兄に与える